

## 『観門要義鈔』流传史における

### 新資料

——興空書写本を中心として——

廣川 堯 敏

今回新たに発見した證空著『観門要義鈔』（以下略称）の興空書写本（大谷大学所蔵）は左の二種類の仮名書古写本で、あまり年代的に古い写本ではないが、同一筆跡であり、合計七冊現存する。

（『観門義』を古くは『自筆鈔』と呼んだ）

（一） 札讀自筆鈔 四冊（一、二、五卷） 欠本（六、七卷欠）

（二） 般舟讚自筆鈔 三冊（一、二、七卷） 完本

従来『観門義』の仮名書古写本で、発見されていないのは、『般舟讚自筆鈔』下巻と『法事讚積学鈔』の仮名書本であったが、本発見によつて残るは法事讚積学鈔のみとなつた。これら二種の古写本の書写年代は不明であるが、書体、花押等から寛永の頃かと推定される。その奥書によると、濃州方懸郡福光郷（今の岐阜市の郊外）の称名寺において大永二年（一五二二）五月に『札讀自筆鈔』を、また同郷の安養寺において翌々年の大永四年（一五二四）の五月から六月にかけて『般舟讚自筆鈔』を、それぞれ妙覚が書写し、それをさらに後世（寛永の頃か）末流をくむ端蓮（？）寺の興空隆鳳が書写したものである。奥書にある妙覚はかなり美濃の地方にゆかりの深い人師であつたようである。

さて、『浄土宗三國伝来血脉譜（西山流）』や『法水分流記』によると、燈翁教伝の弟子に妙覚を見出すことができる。つまり、証空—立信—道教—道意—頓乘—堯惠—妙意—良頓—良倪—教伝—妙覚—智伝—林香—善相……

と次第する深草派祖円空立信の系統における妙覚である。妙心寺歴代過去帳によると、この深草系の妙覚は妙心寺第四代の住職となつており、その没年は天文十一年一月五日で、『法事讚自筆鈔』を書写した大永四年より十八年後にあたり、大永四年が五十才とすると六十八才に相当する。したがつて、年代的に一致する。しかも京都養福寺蔵西山流系譜によると、美濃の安樂寺の開山となつており、美濃と深い関係にあることがわかる。さらにはこの妙覚の著作に『浄土真宗西山一流深草義戒脉相承』が現存しており、その著書に『自筆鈔』を二回引用している。以上の点を総合すると、深草系の妙覚は、①年代的に一致すること、②美濃に深い関係があること、③自著に『自筆鈔』を引用していること等の理由によつて興空本の妙覚と同一人と考えざるを得ない。したがつて、以上の諸資料を総合すると、興空本の妙覚は文明六年（一四七四）に生まれ、四十八才（大永二年）から五十才（大永四年）にかけて、上記の三本を書写し、その頃までに美濃方懸郡福光郷の安養寺の住職となつており、十二年後の天文五年（一五三六）、またはそれ以降に妙心寺三代燈翁教伝の後をうけて四代として妙心寺に入寺し、天文六年（一五三七）には慶獄（のちに誓願寺五十一代となる）に天台菩薩戒を授け、天文十一年（一五四二）一月五日、六十八才で入滅した、ということになる。このように妙覚が深草流の妙覚であるとすれば、これら二本は深草流に流传した、『観門義』の貴重な古写本であると

いえよう。

そこで、深草流における『観門義』の流伝を概観してみたい。

もともと深草義の方が本山義や西谷義よりも、證空滅後、より早い時期から『自筆鈔』によつて大きな影響を受けていたと推定される。深草義祖円空立信は證空の直弟子で、かつその門下における地位もきわめて高かつた。證空入滅直後、立信は淨照、尊牀について西山三鉢寺の第三長老となり、第六代の法灯を継ぎ、證空の入滅地遣迎院の付属をうけている。故に、證空滅後、『自筆鈔』を管理保管していた第一人者であつたと推定される。立信によつて保管されていた『自筆鈔』はその弟子顯意道教、雙空道意、暢空頓乘、善偉堯恵と次第して伝持され、證空滅後約百五十年、円福寺三代堯恵は『選択集私集鈔』に『自筆鈔』を二回引用している。堯恵の後、『法水分流記』によれば、淨俊妙意、教然良頓、天盈良倪、燈翁教伝、等順妙覚と深草の法灯は伝承されるが、妙覚にいたるまでその著作を見ることができず、その引用状況を知ることができない。妙覚にいたつて、『自筆鈔』を書写し、かつ自著『浄土真宗西山一流深草義戒脈相承』に引用している。その後、江戸時代によつて、端運(?)寺の興空隆鳳が妙覚本を再書写するわけである。そしてさらに『観門義』の流伝を知る資料として、文政七年(一八二四)頃、誓願寺第七十七代勅空貫常が『般舟讚自筆鈔』を所持していたことを伝える『石黒本』(『般舟讚自筆鈔』上巻のみ、石黒観道師没後所在不明)表紙見返しの、恬澄の添え書をあげることができる。この『石黒本』は奥書を欠いているため詳細は不明であるが、あるいは妙覚本の転写本であるかも知れない。

次に今回の発見によつて従来不明であつた『般舟讚観門義』の講

『観門要義鈔』流伝史における新資料(廣川)

述年時および講述場所が明らかになつた。現在までに明らかにされた『観門義』の講述年時は、

- ① 観経疏観門義(建保三年五月廿九日、承久三年八月十三日)
  - ② 観念法門観門義(承久三年八月十四日、貞応元年八月廿九日)
  - ③ 礼讚観門義(貞応三年四月廿六日、嘉禄二年五月十五日)
- であるが、『般舟讚自筆鈔』の奥書によれば、②の終講と同じ日である、貞応元年八月廿九日に始り、③の開講二年前の貞応三年四月廿四日に終つている。したがつて、『観門義』の講述は『玄』、『序』、『定』、『散』、『観』、『舟』、『礼』の順で、三十九才より五十才までの十一年間にわたつたわけである。(『法事讚観門義』の講述は恐らく『礼讚観門義』の後であろう)

以上要約すれば、興空書写本の発見によつて、

- (一) 『般舟讚観門義』の仮名書本が初めて発見されたこと。
  - (二) 深草流における『観門義』の流伝が明らかとなつたこと。
  - (三) 『般舟讚観門義』の講述年時および講述地が初めて、明らかとなつたこと。
  - (四) 本写本類の中に含まれていた『法事讚自筆鈔』という表題は明らかに妙覚の誤りであつて『法事讚積学鈔』の仮名書本ではないこと。
  - (五) 現行の西山全書本に多くの誤字、脱落を発見したこと。
- 等の諸点が明らかとなつたといえよう。